令和8年度第1回半田市総合教育会議 会議録

開　催　日	令和8年6月2日(火) 10:00～11:00
開 催 場 所	半田市役所 4階 会議室402
構 成 委 員	半田市長　久世孝宏 教育長　榊原雅晃　　教育委員　新美　大 教育委員　久米　宏和　　教育委員　桂　優子 教育委員　正村　日登美　　教育委員　堀崎隆資
構成委員以外の出席者	教育部長　森田知幸　　学校教育課長　内藤　誠 主任指導主事　木下稔章 企画部長　大木康敬　　企画課長　内田敦士
議事録作成者	学校教育課主査　石川 修平
協 議 事 項	・幸せになるための教育に対する取組及び評価について ・不登校の状況について

〈 開会 10時00分 〉

1　市長あいさつ	（市長） 皆さん、おはようございます。 本日はお忙しい中、総合教育会議にお集まりいただきまして、ありがとうございます。 また、日頃から半田市の教育行政に対しまして、皆様には本当に熱意を持って関わっていただいていると感じております。大変ありがたく思っていますし、一緒に頑張っていけることを嬉しく思っております。 本日は１時間という限られた時間ではありますが、皆様といろいろな意見交換ができればと思っています。 私からは大きく二つ、テーマを設定させていただきました。 一つ目は、「幸せになるための教育」です。これは、私が市長である間は、継続して状況を確認していきたいと思っています。現場でどのような取組があるのか、またそれに対して皆様がどのように感じているのかをお伺いしたいと思います。 二つ目は、不登校の状況についてです。令和７年度において、半田中学校で、不登校から学校に復帰してきた生徒の数が非常に多く出ていました。昨年度からのＩ（アイ）ルームの成果なのか、はっきりとは分かりませんが、私も注目していたところです。半田中学校だけの話ではなく、市全体として、この状況を皆様がどのように感じているのかもお伺いできればと思います。 また、その他の時間でも、教育全般についていろいろなお話ができればと思っています。短い時間ですが、よろしくお願いいたします。

２　教育長あいさつ	（教育長） 　おはようございます。 　市長におかれましては、日頃から教育委員会の取組に深いご理解とご協力をいただいております。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。 　小中学校では、今年度も「元気いっぱい、笑顔いっぱい、やさしさいっぱいに伸びようとする子どもを育てよう」、また「幸せについて考えよう」という理念を掲げ、よりよい学校教育を求めて、教育委員会一丸となって努めてまいります。 　今、市長からもお話がありましたが、本日は「幸せになるための教育」の進捗状況のほか、不登校の現状について協議を行います。 　不登校児童生徒数は、コロナ禍以降、全国的に急激に増加しており、年間３０日以上の長期欠席の児童生徒数は、全国で３５万人にも達していると言われています。 　半田市においても、一昨年度までは増加傾向にあり、昨年度は若干の減少が見られましたが、依然として高止まりの状況であり、喫緊の課題と捉えています。 　今年度は、不登校対策の目玉として、すべての中学校に校内教育支援センターを設置することができました。半田中学校はこれで３年目となり、それなりの成果が出ていることも、後ほど確認できると思います。他の学校はまだ運用が始まったばかりで、効果を検証するところまでは至っていませんが、「まず一人を救う、新たな一人を出さない」という方針のもと、各学校で多面的、地道な不登校対策に取り組んでおります。 　後ほど具体的な数値に基づいてご協議いただければと思います。本日はよろしくお願いいたします。
３　協議事項 １）幸せになるための教育に対する取組及び評価について	（学校教育課　主任指導主事） 　令和７年度の半田市の教育目標に対する取組について、幼稚園、小学校、中学校の評価をもとに分析し、成果と課題について報告。 （市長） 　私が感じたのは、やはり小学校は児童も保護者も数値が高く、意識して取り組んでいる感じがあります。一方で、中学校は下がっているという結果が出ています。 　小学校は、学級活動等の時間を使いやすいのかなと思いますが、中学校になると教科担任制で先生が変わりますし、担任の先生がずっと見ているわけではありません。朝も忙しいでしょうし、部活動や連絡事項もあります。実際、中学校ではこうした取組の時間を取りにくいのでしょうか。 （学校教育課　主任指導主事） 　学級担任制の小学校と教科担任制の中学校では、学級単位で取組を進める機会の取りやすさに差はあると思います。 　ただ、小学校が常に学級単位で取り組んでいるわけでもありませんし、朝や帰りの会などでできる活動であれば、中学校でもできないわ

	けではありません。 　一方で、中学校では、幸せになるための教育への取組について学校全体で共通理解のもと取り組むことが難しかったという反省があり、評価の結果にも表れていると感じています。 （市長） 　小学校だと、例えば「今日のハッピーさん」のような取組をしても、子どもたちは盛り上がると思います。 　ただ、中学校になると、少し恥ずかしさも出てくるでしょうし、同じやり方では難しいのかもしれません。 　中学校に合った良い取組事例を共有できると、参考になるのではないかと思います。 （堀崎委員） 　私は教育相談員としても小中学校に入っていますが、市長が言われたようなことは感じています。 　中学校は、職員全体で取り組むという意識が、まだ十分ではないように感じます。 　学校公開の様子を見ても、小学校は幸せに特化した授業をきちんと公開していることが多いですが、中学校は通常の授業公開に近い形になっていることがあります。 　職員の意識が同じ方向を向いて力が発揮できていないという印象があります。そこをクリアできれば、中学校は行動力があるので、軌道に乗れば大きく進むと思います。 （市長） 　現状が分かれば、ではどうしていくかという話になりますね。 　中学校は子どもも成長しているので、やろうと思えば小学校より高度なこともできる環境だと思います。 　課題は、どうやって教職員の意識を高めていくかということですね。 （新美委員） 　令和７年度の児童生徒アンケート結果を見ると、中学校は全体的に「そう思う」と「だいたいそう思う」を合わせた肯定的な回答の割合はそれほど悪くないと思います。 　ただ、小学校では学校によって、「そう思う」の割合が高いところと、「だいたいそう思う」の割合が高いところに差があり、それがヒントになるのかなと思う。 　各校長先生も市長の思いは感じてくれていて、あらゆる場面で「幸せになるための教育」というキーワードは出てくるし、教職員の朝礼等でも話をしてくれいているとは思いますが、色々なことを伝達していくと徐々に縮小してしまうものもあると思う。これは、学校の取組の違いが出ているのか、子どもたちの回答傾向なのか分かりませんが、回答割合の違いにヒントがあるのではないかと感じています。

	（学校教育課　主任指導主事） 　すべての学校の状況を細かく把握しているわけではありませんが、令和５年度以降、年を経るにつれて各学校の学校経営目標の中に「幸せ」という言葉や考え方が記載されることが当たり前になってきました。 　学校訪問でも、校内の掲示に「幸せ」という言葉があったり、「先生方の幸せとは…」という標語のようなものが掲示されていたりする学校もあります。 　また、校長先生が朝礼の中で、意図的に「幸せ」という言葉を使って講話をしているという学校があることもお聞きしています。児童生徒が「幸せについて考えることができた」と感じるためには、やはり見たり聞いたりする機会が増えることが大切だと思います。「あそこに書いてあったな」「先生が話していたな」と感じられる機会を増やすことが、児童生徒の意識につながっていくのではないかと思います。 　今年度も、校長会などを通じて啓発していきたいと考えています。 （新美委員） 　ある小学校は児童生徒の「そう思う」の割合が非常に高く、それが保護者の結果にも影響しているように見えます。 　これは、家庭の中でも、子どもの幸せを考える中で、保護者自身も幸せについて考えているのではないかと感じます。数字としては、非常に良い結果が出てきていると思います。 　一方で、教員の評価については、評価方法を変えたこともあって令和７年度は評価が多少下がっていますが、次年度以降の経年変化を見たときによくなっていることを期待します。 （市長） 　子どもたちと保護者の評価を見ると、肯定的な回答が大部分を占めているので、やはり取組が浸透してきていると感じます。委員のご指摘のとおり、特に保護者の評価が高いということは、家庭にも入ってきているのかなと思います。 （久米委員） 　児童生徒と保護者の評価で肯定的な回答の多さを見ると、すごい結果だと思いますし、保護者の評価が高いのを見ても家庭にまで浸透していると感じます。先日、ある学校の学校訪問に行きましたが、学校中に子どもたちの笑顔の写真がたくさん掲示されていました。校長先生の学校づくりの姿勢だと思いますが、そうした日常的な取組が結果につながっているのではないかと思いました。 （堀崎委員） 　小学校と中学校で差があるのは、現場に入っていても感じます。 　小学校は継続性があります。担任の先生もそうですし、掲示物やディスプレイにも、幸せについての取組が継続して表しやすいと思います。

	一方、中学校では連絡事項が多く、継続した掲示が難しい現状もあります。ではどうするかとなりますが、例えば中学校では、道徳などの授業の中で、幸せをテーマに考える機会を設けることも一つの方法ではないかと思います。 小学校みたいなディスプレイが中学校でもいいかというとそうではないと思うため、中学生に合った形で生徒にどう訴えかけていくかを真剣に考える必要があります。 （市長） 確かに、小学校は掲示物などで工夫しやすいですが、中学校は授業や勉強が中心になります。そうすると、授業の中でどう触れてもらうかというのは、一つの課題かもしれません。 （堀崎委員） 中学校の公開授業では幸せになるための教育がはっきり表れている授業が少ないため、そこから直す必要はあると思います。 （市長） 一方で、特別なことをやって先生の負担を増やすことは本意ではありません。普段やっている中で工夫してもらうという考え方も大事だと思います。 （堀崎委員） 提案ですが、ハッピーウィークに全学級で道徳をやればいいと思います。 （新美委員） 公開授業の日に全学級で幸せについて考える時間を設けることができるということですね。 （教育長） 幸せについて中学生に考えさせることは大切と思いますが、「これをやってください」と市長の意向を受けて学校で実施するという形になると、教育の中立性という観点からは、少し踏み込み過ぎになるのではないかと思います。これまで市長もおっしゃってきたように、やり方や取り入れ方は学校に任せ、先生方がやりやすいように、負担にならないように進めることが大切です。 ただ、「幸せ」というものについて重視し、みんなで考えてほしいという思いは共有していきたいと思います。 また、中学生は発達段階として、小学生のように素直に表現することが難しい面があります。アンケートでも、特に「幸せ」かと聞かれたときに、照れや思春期特有の複雑さから、なかなか「そう思う」を選びにくいこともあると思います。家庭でも、中学生が親と幸せについて語り合う機会は、小学生に比べると少ないかもしれません。そう考えると、中学生の数値が小学校より低くなることは、ある意味自然なことでもあると思います。

	数字を上げるために必要な取組みをすることは重要ですが、何か特定のものを提案して実施する、という考え方には少し慎重であるべきだと思います。 当然に、もっと良くしていきたいという思いはありますが、数字にこだわりすぎるのではなく、自然に上がっていくような努力をしていくことが大切だと思います。 また、半田市の教員は全体で５００人ほどいますが、そのうち毎年１００人程度が入れ替わります。つまり、何かを浸透させようとしても、毎年一定数の教員が異動するため、どうしても時間がかかります。 それでも、この数年間で「幸せ」という言葉はかなり定着してきています。今年の新任教員の受入式でも、代表者の挨拶の中に半田市の幸せについての話が出てきました。目に見えて浸透してきている部分はあると思います。 （市長） 　時間がかかる中でも、今回のアンケートで児童生徒や保護者の肯定的な回答の割合が高かったことは、率直に良かったと思っています。 　中学校については、やり方にもう一工夫必要なのかなと感じました。引き続き、各学校を応援していきたいと思います。 （堀崎委員） 　中学校で言えば、昨年度、半田中学校に講師としてゴルゴ松本さんが来られたときの講演が非常に良かったと思います。幸せや生き方に関わる内容で、中学生にはそういう形の方が自然に入っていくこともあると思います。憧れの有名な方が幸せについて自分の言葉で語ってくれると、生徒も受け止めやすいのではないかと思います。
２）不登校の状況について	（学校教育課長） 　資料をご覧ください。 　資料上段の表は、過去３年間の不登校者数などの推移です。小学校、中学校それぞれの人数と割合、また愛知県と全国の状況を併記しています。表の下段には、半田市における学校復帰率も示しています。 　注目していただきたいのは、令和７年度の不登校者数と割合です。これまで増加傾向でしたが、小中学校ともに減少に転じています。 　今後、数年間の推移を見なければ断定はできませんが、各学校の地道な取組の成果に加え、令和６年度にスクールソーシャルワーカーを１名から３名に増員し、学校との連携体制を強化してきたことが、２年目に数値として表れてきたのではないかと考えています。 　特に中学校では、令和６年度に半田中学校に校内教育支援センターであるＩ（アイ）ルームを設置しました。これが軌道に乗ってきた結果ではないかと捉えています。 　資料をご覧いただくと、半田中学校の令和７年度の復帰者数が、前年度までと比べて大きく改善していることが分かります。 　なお、令和８年度からは、他の４中学校にも校内教育支援センターを設置しました。スクールソーシャルワーカーもさらに２名増員し、５名体制としています。支援の充実に努め、今後さらなる改善につな

	げていきたいと考えています。 　また、資料下段の表は、令和７年度の不登校の態様を分類したものです。学校ごとの見立てによるものですので、厳密に分類できるものではありませんが、傾向として参考にしていただければと思います。 　今年度の教育相談体制をまとめた資料も添付しておりますので、併せてご確認ください。説明は以上です。 （市長） 　学校復帰率の定義ですが、これは必ずしも普通教室に戻ったということではなく、校内教育支援センターや保健室、支援ルームなどに登校し、登校日数としてカウントできた児童生徒の数になります。半田中学校では、そこからさらにクラス復帰できた生徒もいると聞いています。令和８年度から他の中学校にも広げたところで、よりよい成果が得られることを期待しています。 　これについて、感想や質問があればお願いします。 （堀崎委員） 　私は、不登校を何とか減らしたいという思いで教育委員を務めていますが、この校内教育支援センターは本当にありがたい取組だと思っています。半田中学校にも関わらせてもらいましたが、復帰率が上がってきたのは、半田中学校が一生懸命取り組んできた成果だと思います。 　お願いしたいのは、他の４中学校にも、半田中学校で大切にしてきた思いが浸透していくことです。そうすれば、令和８年度にはさらに良い結果が出るのではないかと期待しています。 　今年度から半田中学校以外にも校内教育支援センターが設置されたために、その様子を見ている中で、他の４中学校では半田中学校の良さについて、「専属の先生がいるから」と言われることもありますが、私は半田中学校は全職員で共通理解が図られていることが大きいと思っています。 　不登校にはいろいろな原因がありますが、私は、心的エネルギーが低下している、つまり心のガソリンがなくなっている状態が大きいのではないかと思っています。それを徐々に高めていくというアプローチの仕方を教職員が共通して理解することが大切です。教職員を対象に不登校へのアプローチについて、不登校問題の第一人者である花輪敏男氏を講師に招いて研修を行うことも有効ではないかと思います。 （正村委員） 　不登校になる前の段階、例えば小学校の段階で、何らかのサインを出している子どもたちは結構いるのではないかと思います。 　ディスレクシアや聴覚過敏など、教室内にいることが難しい理由がある子どももいます。そういう子を早めに把握することも一つの手だと思います。 　小学校１年生から学校に行けていない子どもたちが、いきなり中学校の内容を学ぶのは難しいと思いますので、タブレットなどを使って、小学校の内容まで戻り、スモールステップで達成感を味わえるよ

	うな支援ができるとよいと思います。 　義務教育で必要な基礎的な学びが抜けてしまうと、高校に進んだ後に苦しむことがあります。例えば、計算の基礎が分からないまま高校に進み、結局続かなくなってしまうという話も聞きます。 　子どもにも保護者にも、義務教育の間の学びの大切さを伝えることが必要だと思います。教育支援センターの中に１年生の内容、２年生の内容、掛け算、割り算など、やりたいときに「ここからならできる」「ちょっとやってみようかな」と手に取れるような教材や柔軟な仕組みがあると、もっと学力面のフォローができるのではないかと思います。 　小学校の３、４年生あたりで学校に行き渋りがあった子が、中学で不登校になってみえるような親御さんと喋ることがあるので、そんなときに、相談できる窓口があると早くに対策できるのかな思います。 （市長） 　校内教育支援センターでは、小学校の内容に戻って学ぶこともできるのでしょうか。 （学校教育課長） 　校内教育支援センターでは、基本的に、そこに来た生徒がその日一日をどのように過ごすか計画を立てます。学習面では、タブレット教材「Qubena」などを活用し、自分の学年に関係なく、過去の学年の内容まで遡って学ぶことができます。小学校の内容まで戻ることも可能です。 （正村委員） 　それを子ども自身が選ぶのは難しいと思います。 　先生が見れば、「ここができていないね」と分かると思いますが、本人にはプライドもありますし、中学生なのに小学校の内容から始めるということに抵抗がある場合もあります。 　だからこそ、本人の気持ちに配慮しながら、こっそりと「ここからやってみよう」と示してあげるような支援があると、もっと学習が伸びていくのではないかと思います。 （市長） 　復帰させるための技術やノウハウは、これから学び、蓄積していく必要があると思います。 　今回、この時期に総合教育会議を行う理由の一つは、来年度予算に向けて、教育委員会から多くの要望が出る中で、何に重点を置くかを考えるヒントにしたいということです。 　不登校対策に力を入れるのであれば、学校全体がそうした意識を持てるような仕組みや研修について、具体的な提案があれば検討していきたいと思います。 （桂委員） 　私は宮池小学校で不登校支援に係るサポートルーム等のお手伝い

	をしています。そこに来る子どもたちは、不登校のように必ずしも３０日以上欠席しているわけではありませんが、ただ、「教室がしんどい」と感じている子どもたちが利用している。 　不登校にはなってはいないが、不登校傾向の子どもたちは増えているのではないかと思います。 　教室以外に行ける場所ができたことで、登校できる子どももいます。学校には来てるけど、教室にいるのがつらいという子どもたちにとって、この場所が利用しやすい場所になっていくといいと思います。 　教室に行くことがしんどい子が、そこで少しエネルギーを溜めて、また教室に戻っていく、そのような場所になるとよいのではないでしょうか。 　小学生でも、みんなと一緒にいることがしんどい子が、そのような場所で息抜きのように少し過ごし、そのまま教室へ戻っていくことがあります。「ここにいても大丈夫」と思える場所があると、学校や教室にも安心して戻っていけるように感じます。 （学校教育課長） 　不登校になる前の段階で早めにアプローチすることは、ここ数年、私たちも意識しています。「新たな一人を生まない」という合言葉を大切にし、登校しぶりの傾向がある子どもに早めに関わるよう心がけています。その結果が、令和７年度の数値にも表れてきたのではないかと思っています。 　各中学校に設置した校内教育支援センターは、年間３０日以上欠席した生徒だけが利用できるものではありません。在籍する教室に入りづらい生徒についても、相談を受け、一定の手続きを経たうえで利用できるようにしています。 （桂委員） 　同じような状況の子がいることで、「自分一人ではない」と思えることも支えになると思います。他の子も頑張っているから、自分も少し頑張ってみようかな、という気持ちになることもあります。そういう意味でも、いろいろな子どもに使ってもらえる場所になるとよいと思います。 （市長） 　子どもによって「きっかけ」は様々かと思いますが、だからこそ、心のエネルギーのため方や支援の仕方について、ノウハウを積み上げていくことが大事だと改めて感じました。
４　その他	（新美委員） 　先ほど市長から、来年度予算に向けて教育委員会からいろいろな要望が出てくるという話がありました。 　不登校の子どもや福祉的な支援が必要な子どもたちへの支援はもちろん大切である一方で、市内小中学校の大多数の子どもたち、先生方の手をあまりかけなくても自分で頑張っている子どもたちにも、税

	金の使い道として公平に目を向ける必要があるのではないかと思います。学習面、部活動面、学校生活全体について、そうした子どもたちも頑張っています。支援が必要な子どもたちへの手当は当然に必要ですが、それだけに偏るのではなく、すべての子どもたちに対してどう支援していくかという視点も持つ必要があると思います。 　保護者が子どもに望むことは、必ずしも高い進学実績だけではなく、生きていく力をつけて、幸せになってほしいということだと思います。そうしたことを、市としてもっと伝えていけると、子育ての面でもアピールできるのではないかと思います。 （市長） 　税金の使い道は非常に難しいところです。行政として税金をお預かりして事業を行う以上、福祉的な部分に重点的に配分することは、行政の使命でもあると思っています。民間では対応が難しいことを行政が担う必要がありますので、どうしてもそちらに力を入れることになります。ただ、すべての子どもたちに健やかに育ってほしいという思いも当然あります。私の方針としては、個別に一人ひとりへ手当をするというよりも、幸せになる時間や生きがいを見つけていくための環境を整えることに力を入れたいと考えています。地域公共交通をどう整備していくか、学校施設をどう更新していくかなど、全体の環境づくりが大切だと思っています。普通に頑張っている人たち、税金を納めて地域を支えている人たちのことを忘れているわけではありません。そうした人たちにも届く施策を考えていきたいと思っています。 （新美委員） 　若い世代を見ていると、与えられるのを待っているように感じることがあります。福祉的な仕組みや居場所づくりは大切ですが、与えすぎているのではないかと思うこともあります。困ったら誰かが、市が何とかしてくれる、という意識になりすぎると、自分で考え、自分で行動していく力が弱くなってしまうのではないかと思います。 　もちろん、昔に戻せばよいという話ではありませんが、支援と自立のバランスは大切だと思います。 （市長） 　幸せについて考えるだけではなく、そのために行動できる人になってほしいと思いますし、そのための支援も大切です。 　「元気いっぱい、笑顔いっぱい、やさしさいっぱい」という言葉に加えて、「伸びようとする子ども」という考え方が入っているのも、自発的に動いてほしいという思いがあるからだと思います。
	（教育長） 　本日は、有意義な協議になったと思います。ありがとうございました。 　不登校対策は本当に大きな課題です。今年度から各中学校に校内教育支援センターを設置し、スクールソーシャルワーカーも増員しました。これらが今後どのような効果を表すかを見ながら、さらなる充実

	についても考えていく必要があると思います。 　一方で、不登校対策の根幹は、子どもたちが通いたくなる学校づくりだと思っています。 　そして、子どもたちが通いたくなる学校にするためには、先生たちが勤めたくなる学校でなければならないと思います。 　先生たちが楽しそうに働いていない学校に、子どもたちが来たいと思うわけがありません。 　先生たちが仲良く楽しそうに働き、子どもたちがにこにこ元気に通い、地域の人たちも「あの学校はいいね」と言ってくれる、そうした学校の姿を実現できたらと思っています。 　教育委員会としては、今後も教育に対するご理解とご協力をお願いしたいと思います。 　本日はありがとうございました。

〈 閉会　17時00分 〉